

昭和二十九年年度
眞宗同學會大會紀要

「聞名」の本質について

宇治谷祐顯

古來、聞名並に聞名生因の義趣や、その起因などに關しては、早く龍樹の「十住毘婆沙論」、「大智度論」をはじめとし、諸師先覺の手によつて、大約、聞名の生因は佛願力のそれに依るものと、聞名以後の修道の結果に依るとするもの、またそれは大乘教徒が小乗教徒に對する引入方便説でもあつたこと、而して聞名往生説の起因は原始大乘時代に於ける Avāṛṭya 思想の一轉に依るとするものなど、淨土教理の一駒として種々に考察せられてゐる。

いま、私はこれを一面見方をかえて、原始經典宣説以來の念佛義の本質、即ち佛を隨思隨念 (Buddha-anussati (pāli) し、佛を作意 (Buddha-manasikāra) する底の、所謂念佛義の原始的、本質的考

究聯關のもとに、聞名並に聞名生因の思想は、念佛及び念佛生因の思想と異名一體、不即不離の關係に於いて理解し得ないであろうか、即ち聞名それ自體を淨土教理の一法として獨立的に考へる事よりも、實は聞名すること、それがそのまま同時に聞信歡喜、念佛得道する事になるのであつて、聞名も念佛もその本質に於いては何等變るところのないものと考へ得られないであろうかと言ふ一視點を持つ。

その理由としては、

[I]、まづ現存阿含中(但し Nikāya は出沒異同あつて、一樣でないが)には聞名の必要性を處々散説していること(經證略)。

[II]、逸早き時代から佛遺弟の念願と教團護持のためには、すべて佛の遺法を聞知隨念することが不可缺、必緊事であり、且つ正念行の尊ぶべき傾向にあつたこと。

「比丘廣學多聞守持不忘……中略……復次兩勢比丘常行於念、成就正念久所曾習、久所曾聞、恒憶不忘」(中、瞿默目犍連經 六一、664a)

655a)

[III]、[I]に於ける如き聞することの思想動向が、逐次後世佛徒の心情によくマッチし、比較的古い時代の初期大乘經典中、頻りに聞(名)佛と念佛との關係を不即不離の立場に於いて説き出していること。

a、「獨一處止念西方阿彌陀佛今現在隨所聞常念」(般舟三昧經 大、十 三、899a)

b、「菩薩聞佛名字欲得見者常念其方即得見之」(同右、899b)

[IV]、數多の大乘經典、就中、淨土教系統經典中には、聞名それ自體の得益を宣説するものもあるが、それらの多くは概して聞名を説くと同時に念佛、見佛、稱佛の思想と混然融合して説き出していること。

(a)、聞我名者必得阿耨多羅三藐三菩提」(摩訶般若波羅蜜經、大八 221 a)

(b)聞我名者、禮拜我者除却五百億劫生死之罪」(觀佛三昧海經、大、十五、893b) (その他略す)

[V]、また一部、原典學的解釋が許される

とするならば、聞名の聞とは、原語で多く、gru (聞く) と表現せられてゐるが、それには左の如き意義と慣用例のあること。(モニエル梵英辭典に依る)

- 1 ' to hear; to Listen.....
聽へ
 - 2 ' to be obedient.....
隨順する || namas (歸命)
 - 3 ' be at the service of.....
奉仕する
 - 4 ' memory, remembrance...
憶念、隨憶、|| anusmrti
 - 5 ' 5 having~(gruta risk).....
受持 (リン神の受持)
- また、名(號)とは、「梵文壽經」に於いて、Nama-dheyaとあり、nama (name; characteristic nature) と dheya (く、/dha) (to be applied or put in paractice) の合成語であるから、それは單なる名前と言ふよりも、名前の appellation であり、括弧内後者の意義に解するとき、特質の適用實踐でもあること。

三願轉入について

大河内了悟

一。三願轉入の文に就いて、從來の多くの考察は、後序の「建仁辛酉曆兼維行分歸本願」の文と對照して、宗祖の獲信が頓(直)入か漸(轉)入かといふことであつたが、信卷本の大信海釋下に「凡按大信海者乃至非頓非漸乃至唯是不可思議不可稱不可說信樂也」と非頓非漸の大信海が表現されて居り、更らに信卷末には「悲哉乃至不喜入定聚之數」と不入の悲痛が告白されてゐるのである。

かの頓入と漸入と見ゆる「建仁辛酉曆」の文と三願轉入の文との二文は共に化身土卷の所明であり、この非頓非漸と不入の悲痛との二文は共に信卷の所顯である。化身土卷は權假を示し信卷は眞實を語るものである。權假は遂に眞實に批判され攝取さるべきものである。人間として入を喜ぶは假にして不入を悲しむこそ眞の人間であらう。信を機とする宗祖に在つては、信は眞の人間を自覺するこ

とであつた。眞の人間の自覺、即ち不入の悲痛を機として、非頓非漸の不可思議不可稱不可說の信樂があり、不入の入がある。こゝに於いて、從來の頓漸の問題は根本的立場に置かれて、會通の要はなくなり、非頓非漸に即する頓漸、頓に即する漸の眞意が見出さるゝのである。

二。然り而して、古來三願轉入といふ名目が用ひられてゐるが、文を子細に見れば、嚴密には三願、回轉入といふべきである。第二十願へは「回入、善本徳本眞門」と云ひ、第十八願へは「轉入、選擇願海」と書かれてある。普通、回と轉とは同義に用ひられてゐるが、こゝにはこの二字が使ひ分けがしてあり、殊に轉については、唯信鈔文意に「轉ずといふは罪を消し失はずして善になすなり」といふ宗祖の解釋があり、且つ第二十願と第十八願との二願の特質からそれらへの入り方も異なるべきであつて、こゝの文では、回と轉とは意義を異にすると思ふべきである。

回と轉とは、總じては回、別しては轉である。回入に於ける法への方向轉換に包まれてゐる機の自覺が不入の入なる轉